オリバー・ゴールドスミス

3　エドウィンとアンジェリーナ

I.

「もし　谷間のやさしい隠者様
　人跡まれな道を　ご案内下さい
むこうにかすかに見える明かりが
　暖かく谷を照らすところまで行くはずなのが

II.

「ここで　心細くも道に迷ってしまいました　5
　足はふらふら　進みません
森は限りなくひろがり
　進めば進むほど　むこうにのびてゆく気がします」

III.

「若者よ」と隠者は言った
　「危険な暗がりを行くのはおよしなさい　10
むこうにちらちら見える明かりは　きつね火で
　そなたをおびき寄せて　死の谷へ落そうとするもの

IV.

「身を寄せる宿の無いものには
　わたしの戸口は　いつでも開けてある
食物は碌にも無いが　15
　よろこんで供しよう

V.

「さあ　今宵は遠慮なく
　わたしの小屋にあるものを楽しまれるがよい
イグサの寝床と　貧しい食事と
　わたしの祝福と　眠りだけじゃが　20

VI.

「谷あいにのんびり遊ぶ羊どもに

　手をかけることは決してしない
憐れみをいただく神様のお教えで
　そのものどもには憐れみを施す考え

VII.

「しかし　草茂る山腹からは　25
　罪にならないごちそうをいただいてくる
小袋いっぱいに　草や木の実をちぎり
　水は泉からいただくのじゃ

VIII.

「されば　さあ巡礼者よ　気兼ねはいらぬ
　この世の気づかいは　すべて無用のこと　30
御天道様(おてんとさま)のもとで　人は十分に恵まれ
　そのわずかなる恵みを　永く待たされることはない」

IX.

天から落ちる柔らかい雫(しずく)のように
　隠者のやさしい声が伝わる
見知らぬ若者は　遠慮がちにうつ向きながら　35
　隠者について　小屋にむかった

X.

はるか先の暗い森の中に
　隠者の小屋は　ひっそりと建っていた
そこは　辺りの貧しいものたちや
　道に迷った旅人をかくまうやすらぎの場所　40

XI.

小さな藁葺き屋根の小屋の中は
　盗まれるを気づかうものは何も無く
掛け金を下ろしただけのくぐり戸を開け
　盗人ならぬ二人は中に入った

XII.

ひねもす働いた村人たちが　45
　疲れたからだを横にする時刻(とき)

隠者は　小さな暖炉の火を起こし
　物思わしげな客人を暖めた

XIII.

貯えの野菜を惣菜(そうざい)に
　さあ召し上がれ　とにっこりうながし
昔話を話たくみに語って聞かせ
　秋の夜長をもてなした

XIV.

子猫は　お客があるので嬉しげに
　二人のまわりをぐるぐるまわっていたずら遊び
コオロギが　暖炉の内でコロコロ鳴いて
　薪が　パチパチはじけて火の粉を散らす

XV.

しかし　どんなに心のこもったもてなしも
　客人の愁いを慰めることはかなわず
悲しみに重く胸をふさがれて
　若者は涙を流しはじめた

XVI.

突き上げる悲しみ事に気付いた隠者は
　同情に心痛めて
「かわいそうな若者よ　いったい
　そなたの胸の痛みは　どういうわけで？

XVII.

「幸せな故郷を追われて
　心ならずの流浪の旅か？
裏切られた友情を悲しんで？
　それとも　ふり向かれない恋の悲しみ？

XVIII.

「ああ　幸運がもたらすよろこびなんて
　取るに足らず　朽ちゆくもの
くだらぬものを尊ぶ者は

　くだらぬものよりもっとくだらぬ存在(もの)

XIX.

「友情なんて名ばかりのもの
　人をだましてまどろます魔法の力
富や名声にしのび寄り
　結局は　悲しみに終わる実体のない影

XX.

「恋は　さらにむなしく響くこだま
　近頃の美女(おんな)の 弄(もてあそ) ぶもの
この世に姿は見せず　見えてもせいぜい
　コキジバトの巣を暖める姿

XXI.

「お人好しの若者よ　悲しみなんか黙らせて
　女のことなど　追いはらってしまうがよい」
ところが　隠者が話しているうちに
　恋やつれした客人の顔が赤らんできた

XXII.

驚いたことに　今までなかった美しさが立ちのぼり
　またたく間に　客人の顔一面に広がった
夜明けの空に広がる朝焼けのように
　つかの間の光り輝く美しさ

XXIII.

恥じらいにみちた表情　波打つ胸が
　代わる代(が)わる　驚きの波紋をひろげるうちに
まぎれもなく　客人の正体は露(あらわ)れて
　そこに立っているのは　見るも美しい娘であった

XXIV.

「ああ　失礼な身なりをお赦しください
　哀れな寄る辺なき身をお赦しください
穢れた草鞋(わらじ)で
　あなた様の清らかな場所に踏み込んでしまいました

XXV.

「でもどうか　娘を憐れみください
　愛に導かれて　こうしてさまよっています
やすらぎを求めながら　見いだすものは
　絶望という名の道連ればかり　100

XXVI.

「わたしの父は　タイン川沿いに住んでいました
　裕福な領主でした
財産はすべて　わたしが継ぐと決まっていました
　子供はわたしだけだったからです

XXVII.

「父のやさしい両腕(かいな)からわたしを勝ちとるために　105
　たくさんの求婚者がやってきました
みんな　わたしの美しさをほめ称え
　恋の炎を燃やし　あるいは　その振りをしました

XXVIII.

「次から次と　遺産をねらうものたちが
　豪華な贈り物で張り合います　110
なかで　若いエドウィンもわたしに心を寄せる一人でしたが
　でも彼は決して　わたしへの愛を口にしませんでした

XXIX.

「貧しい　質素な身なりで
　財産も権力もありません
知恵と美徳が　彼のすべてです　115
　でもわたしには　本当はそれだけで充分でした

XXX.

「谷間で　わたしのそばに座って
　彼が　恋の歌をうたうとき
吐き出す息にそよ風香り
　森の木立は美しい調べに包まれるのでした　120

XXXI.

「朝日とともに花咲く花も
　きらめく夜明けの露も
純粋さの証しとしては何ものも
　彼の心には　かなわなかったはず

XXXII.

「きらめく露も　樹に咲く花も　125
　その美しさは　つかの間の輝き
エドウィンの美しさが　ああ　わたしには露と花の美しさ
　そのつかの間が　わたしの操だったのです

XXXIII.

「というのは　わたしはいつまでも浮気な手管で
　うぬぼれて　しつこく彼をからかいました　130
彼の情熱に心を動かされながら
　苦しむ彼を見ては　勝ち誇るのでした

XXXIV.

「ついに　わたしの軽蔑に絶望して
　驕るわたしから去ってゆきました
失恋の孤独を求め　135
　ひっそりと　死んでいったのでした

XXXV.

「悲しみは　すべて　わたしのせい
　わたしは　生涯かけて償うのです
彼が求めた孤独を　わたしも求め
　彼が横たわるところに　わたしも横たわるのです　140

XXXVI.

「寂しく　絶望のうちにひっそりと
　身を横たえて死ぬのです
エドウィンは　わたしのためにそうしました
　今度は　わたしが彼のためにそうします」

XXXVII.

「ああ　それはならぬ」　と隠者は叫んで　145
　彼女を強く抱きしめた
驚いた娘が　咎めるように振り向くと
　抱きしめたのは　エドウィンその人だった

XXXVIII.

「よく見てごらん　愛するアンジェリーナ
　わたしを魅惑した人　さあ　よくごらん　150
長いこと行方不明のあなたのエドウィンが　こうしてここに
　愛するあなたのところに戻ってきたのです

XXXVIX.

「だから　あなたをしっかりと胸に抱き寄せ
　悲しみは　もうすべて忘れよう
二人は　二度と決して別れることはないのです　155
　あなたはわたしの命　わたしだけのもの

XL.

「これからさきは　二度と別れることはなく
　死ぬまで　心から愛し合うのです
あなたの固い心が　悲しみに引き裂かれると
　あなたのエドウィンの心も　張り裂けてしまいます」　160

（山中光義訳）